

緑のセンターだより

公益財団法人 旭川市公園緑地協会 旭川市緑のセンター(相談所)

〒078-8327 旭川市神楽岡公園内 Tel 0166-65-5553 Fax 0166-65-5626

旭川市公園緑地協会ホームページ <http://www.asahikawa-park.or.jp>



No.182

発行: 令和2年2月1日

講習会のご案内

(お申込み・受付は前月の20日から)
2月の講座は1月21日(火)~お申込み
3月の講座は2月20日(休)~お申込み

「果樹の剪定と栽培管理」~リンゴ、サクランボ、プラムほか~

とき 令和2年2月16日(日)

午後1:00~3:00 定員50名

講師 ふじくらますも果樹園

代表 増茂 聡さん



「植物の病害虫と園芸薬品」

とき 令和2年2月21日(金)

午後1:00~3:00 定員50名

講師 緑のセンター相談員



「フラワーアレンジメントづくり」

とき 令和2年3月1日(日)

2,000円

午後1:00~3:00 定員20名

講師 マミフラワーデザインスクール

専任講師 澤沼 雅子さん



2018年度の作品

販売コーナー

緑のセンター内には、販売コーナーがあります。

温室で育てられた植物たちが一鉢200円から買うことができます。

植物によって価格が変わりますが、お気に入りの植物を育てて、日々の生活に癒しをもとめてみませんか?

植物に関するご相談等は、緑のセンター相談員又は植物管理スタッフにお尋ねください。



展示会のご案内



神楽岡公園の四季写真展 1月10日(金)~2月28日(金)

【休館日のお知らせ】

4月~10月は第2・4月曜日が休館日です。(祝日の場合は翌日)

11月~3月は毎週月曜日が休館日です。(")



歩くスキーセットの無料貸出

①スキー板 ②ポール ③スキー靴(靴のサイズ調整のため、靴下をご持参ください)

期間: 2月末日を予定

受付時間: 10時~最終16時まで

*積雪、コース状況は電話にて、ご確認ください。

<園芸の基礎知識> 植物の葉っぱの働き

～ 葉っぱの呼吸 ～

■葉っぱも呼吸をしている

私たち人間と同じように、植物も呼吸をしています。葉っぱも酸素を吸い、二酸化炭素を放出しています。しかし、明るい光が当たっているときには、葉っぱは二酸化炭素を放出せず、逆に吸収しています。

■活性酸素の恐ろしさ

多くの植物の葉っぱは、太陽光の約3分の1の強さしか光合成に使いこなせません。葉っぱにとって迷惑であろうとなかろうと、太陽の光は葉っぱに照りつけ、葉っぱに吸収されます。二酸化炭素が十分にあれば、その光のエネルギーで光合成が進みます。ところが、二酸化炭素が不足すると光合成が進みません。消費されない光のエネルギーは葉っぱにたまり、活性酸素という極めて有害な物質をつくり出すのです。活性酸素は、著しく化学反応をおこしやすい物質で、極めて有害でもあり植物を枯らしてしまいます。

■光呼吸は何のために

強い光が当たると、植物の葉っぱは過剰な光によって発生したエネルギーをためないように、酸化反応などを起こし不足する二酸化炭素を少しでも補うのです。光呼吸とは、害作用をもたらす活性酸素の発生を防ぐ仕組みです。照りつける強い太陽光の中で暮らす多くの植物の葉っぱが、二酸化炭素の不足のために、使いこなせない太陽光の弊害を少しでも避けようと、身につけている巧みな術が光呼吸なのです。

(参考資料:ソフトバンククリエイティブ「葉っぱのふしぎ」ほか)



「誰でも楽しめる美しい菊ガーデン」連続講座(全3回)

花の色に関係なく菊の花言葉は「高貴」「高潔」「高尚」などといわれます。タイプや花の咲き方が豊富にあり、幅広い用途に使われています。

初めて菊を栽培する人でも気軽に楽しむことができる小菊やスプレー菊の生理や栽培方法、殖やし方、菊ガーデンの作り方などについて、12名が参加され全3回にわたって講座が開かれました。

第1回目の5月に「さし芽」で殖やす方法を学び、これを苗として育てました。第2回目の6月には「さし芽」で育てた苗を鉢に植え替える実習をしました。鉢に植え替えた苗は定期的に肥料をあげて、たっぷりと灌水して丈夫に育て、8月ころから花が咲きはじめ、秋遅くまで咲き続けました。第3回目の10月は花後の管理の仕方や親株の育てる方法を学び、受講者の方々の見事に咲き誇ったスプレー菊や小菊を持ち寄って鑑賞しあいました。



参加者は、「さし芽で殖やす方法を学んだので、次は自分で菊ガーデンを作りたい。」「菊の種類が多さや花の咲き方の種類が多さを学んだので、色々な菊に挑戦してみたい。」と意欲を燃やしていました。

この「美しい菊ガーデン」の連続講座は令和2年度も継続して実施する予定です。



植物の病害虫

その 53 「ハダニ類(草花・観葉植物)」



パンジーの被害

マリーゴールドの被害

テーブルヤシの被害

1 寄生しやすい植物

草花: マリーゴールド、パンジー、インパチェンス、サルビアなど多くの植物に発生します。

観葉植物・洋ラン: テーブルヤシ、デンドロビウム、ドラセナ、クロトンなどさまざまな植物に発生します。

2 被害

発生時期は5～11月(暖かい室内では1年中)、気温が高い乾燥時に多く発生し、特に梅雨明け後に被害が目立ちます。主に葉裏で目には見えないほどの微小(0.5mm)な虫が動き回り、吸汁します。吸われた部分は緑色が抜けて小さな白い点になるため、葉が白っぽくカサカサになります。多発すると植物の生育が悪くなり、花数も減り、植物全体が枯れることがあります。

3 生態

ハダニは早ければ約10日で卵から成虫になるほど繁殖力が旺盛で、すぐに被害が広がります。ハダニはクモの仲間なので、糸を出して風で運ばれてほかの植物へ移動したり、糸を出して網を張ります。クモの網は獲物を捕らえるものですが、植物食のハダニの網の役割は、卵の落下防止や乾燥防止、排泄物や脱皮殻などを網につけることで吸汁する葉の汚染防止、強風や豪雨、天敵からの防衛をしています。成虫の状態です。

4 防除法

ハダニは湿気を嫌うので、発生初期までは葉裏や植物全体に頻りに水を霧吹きし手予防します。(多発した場合は霧吹きでは発生を抑えきれません。) 葉裏を見て、被害の早期発見に努めます。特に雨が当たらない軒下やバルコニーは乾燥しやすいので注意します。

密植を避け、鉢植えは鉢の間隔を適度にあけて、風通しをよくします。適度な水やりを行い、発生期には株元に細かいバークチップを敷いて、乾燥しすぎを防ぎます。乾燥時には植物全体に水を霧吹きします。

薬剤散布は発生初期を逃さないように、葉裏を中心に植物全体にむらなく散布します。

主な薬剤は以下の通りです。

○還元澱粉糖化物液剤(商品名:ペニカマイルドスプレー)⇒インパチェンス、パンジー、マリーゴールドなど

○エトキサゾール水和剤(商品名:バロックフロワブル)⇒クロトン、ドラセナ、テーブルヤシ、デンドロビウムなど

気になる早春の庭仕事

今年の旭川の冬は穏やかな少雪傾向で推移しています。

しかし、例年の2～3月には大雪があったり、3月は一気に日照時間が増加して日差しも強くなることから、湿雪となった雪圧で庭木の枝が折れたり、融雪始めには積雪全体が沈むため枝もろとも引っ張られて裂けたりすることがあります。状況によっては雪を取り除いたり、融雪剤を散布するなどの手当も必要になります。また、3月はサクランボやリンゴなどの果樹の剪定作業の時期になります。屋外で仕事をするときには、家族に声がけしてから事故のないように注意して作業を進めてください。



○庭木が折れたり裂けたりした場合・・・軽い被害の場合は補強して、傷口が乾かないうちに癒合剤(トップジンMペーストなど)を塗ってテープなどで硬く縛っておくと治ることがあります。しかし、大きく被害を受けた場合は治癒・現状維持が困難なので、被害が拡大しないように切断し、切り口に癒合剤を塗って雑菌の侵入を防ぐようにします。不要な枝の場合は早めに切断したほうが無難です。

○石灰硫黄合剤の散布・・・越冬病害虫を防除するための石灰硫黄合剤は、樹木の芽が動き始めた段階での散布は薬害が出るので使えません。果樹への散布時期は、剪定後の3月末から遅くとも4月5日ごろまでに使用します。濃度は落葉果樹やバラなどの花木類には約10倍(10リットルの水に1リットルの薬)に薄めて散布します。常緑樹のイチイ、ニオイヒバなどは50倍前後で使用します。また、この液剤は機械類を腐食させるほどの強アルカリ性なので、説明書を再度確認して、周囲にかからないように注意するほか、散布する際には最低限の装備(マスク・防護メガネ・ゴム手袋・帽子・長袖の服)を着用して使用します。人体についた場合はよく洗い流してください。(使用後の散布器具も同様によく洗浄する。)

○芝生の手入れ・・・作業は芝生が乾くのを待って、乾いてから行います。まず、ゴミや秋に生えた雑草を取り除き、芝生用の肥料を1㎡当り50グラムくらいを均等にまきます。(数年に一度は芝生が青くなるまでに目土入れもする。) 病害や損傷がある場合は、芝生の生育が始まってから補修するようにします。

展示室の植物 (88)

オトメツバキ

学名: *Camellia japonica* ツバキ科 ツバキ属

ツバキ(椿)の原産地は日本です。西南暖地では「ヤブツバキ」、山形・新潟県には「ユキツバキ」などが自



生し、これらをもとに改良された一重、八重、千重咲き、絞咲きなどが約 6000 種もあるといわれています。

緑のセンターのオトメツバキ(乙女椿)は、八重咲ピンク系椿の代表的な品種です。西南暖地では公園や庭園、生垣用などで見かける植栽樹ですが、センターでは鉢植えで管理しており、毎年1～2月の厳寒期に咲く花を楽しみに訪れる参観者も少なくありません。花言葉は「控えめな愛」「気取らない美しさ」といわれています。